

## 文化比較・行動比較分科会

塘 利枝子（同志社女子大学） rtomo@dwc.doshisha.ac.jp

本分科会（会長：塘 利枝子）は、文化比較・行動比較研究に関心を有する発達心理学の会員相互の交流を促進し、研究の発展をはかることを目的としている。現在会員は 56 人であり、関東地区と関西地区で年に 1～2 回研究会（一般にも公開）を開催している。1994 年から行われている定例の研究会では、現在までに、文化心理学者を中心に多彩な研究者が講演・発表を行っている。日本発達心理学会大会にて、本分科会主催のシンポジウムまたはラウンドテーブルを毎年行っているが、2003 年度は「文化の水路づけを巡る話題」と題してシンポジウムを行った。2004 年度は「文化的学習としての親子間コミュニケーション」と題してラウンドテーブルを行った。2005 年度も引き続き、大会時には分科会主催の企画を行っていききたいと考えている。また 2004 年度からは以前も行っていった若手研究者による小研究会を行い、「3 歳児から始まる『外国人』カテゴリーの生成」（佐藤 千瀬）、「中国出身年少児の幼稚園参入過程：年少組の特徴を通して」（高 向山）などのテーマで発表を行った。今後も若手研究者による小研究会を行っていく予定である。

また年に 1～2 回ニュースレターを発行し、会員の情報及び意見交換、分科会主催の研究会の概要、国外の学会情報などを提供している。さらに日本発達心理学会開催時には、定例の研究会の発表などをもとにした自主シンポジウムを行うと共に、その後に開かれる総会では活動報告や決算報告を行っている。定例の研究会では文化人類学、保育学、教育学、社会心理学など発達心理学以外の領域の研究者にも講演・発表を依頼しているため、学際的な雰囲気の中で開催される。文化心理学の確立が目指される中で、このような他領域との交流は、新たな理論や方法論を生み出す可能性を秘めており、「若い」エネルギーを内包した分科会と言えるだろう。「文化とは何か」という根本的な問いに迫りつつ、「文化」や人間（霊長類も含む）の「行動」について多方面からアプローチしながら、現在文化心理学の方法論を模索している段階であり、大学院生の発表も歓迎しているため、若手の研究者も大いに活躍できる分科会であるという特色を持っている。

2005 年度も 10 月頃に定例の研究会（分科会会員外でも出席可能）を開催する予定であるが、その内容については未定であり、現在分科会会員の内外からテーマについて募集中である。  
テーマと開催日が決まり次第、「日本発達心理学会 研究情報ニュース」に載せる予定である。

なお、分科会の入会及び研究会の開催・発表については、下記までお問い合わせください。  
〒610-0395 京都府京田辺市興戸  
同志社女子大学 現代社会学部現代こども学科 塘 利枝子  
rtomo@dwc.doshisha.ac.jp